

その他

他大学の授業改善への取組の紹介—学生参画型

1 岡山大学の取り組み

岡山大学が、2001年度から本格的に取り組んでいる「学生参画型授業改善」は注目に値する。これは2000年6月に、「教員中心の大学から学生中心の大学へ」の転換を促した旧文部省の報告書（「広中レポート」）の影響を受けたもので、岡山大学教育開発センターFD専門委員会は、学生参画を新機軸とした大学教育改善を推進するため、中核となる組織づくりに乗り出し、2001年1月に「学生・教員FD検討会」の設置を提案した。その後、各学部の賛同を得て、同年7月に同検討会の始動により、学生参画型教育改善を本格的に展開した。これは、従来のFDという視点から、大学という知的共同体の構成員（学生・教員・職員）が一体となって、教育・研究・社会貢献に繋げるというもので、理想的な大学改革像を目指したものと見える。たとえば、一般学生を対象とした大規模なアンケートを実施し、それを基に学生の視点で教育改善に向けた諸提案を行ったり、新入生を対象とした履修相談を学生の自主企画で実施したりした。詳細な教育改善システムについては、ホームページ（<http://cfd.cc.okayama-u.ac.jp/gp/17gp.html>）のブロードバンドでも公開されている。

一般的には、教育改善というと狭義のFDと捉えがちである。岡山大学でも、「FDのような教員側の問題に学生が口を挟む必要があるのか、また学生にその能力があるのか」との疑念の声も聞かれたが、教育改善は、決して「教員側の問題」だけでなく、「学生と教員との双方の問題」であり、内容によっては職員も巻き込んだ「大学全体の問題」（広義のSD）であるとして、「学生参画型教育改善」を推進した。岡山大学の取り組みは、日本における先駆的な役割を果たしたといえる。

なぜ、岡山大学で先駆的な取り組みが行われるに至ったか。2001年7月、岡山大学はFDの推進に学生の積極的な関与が不可欠との認識から、全国に先駆けて、「学生・教員FD検討会」を組織した。ここでは、第一に、FDが誰のものかという根本的な問いかけがあった。「授業能力の資質向上」は、決して教員自身の成長が第一義的目標なのではなく、授業を受ける学生が「より理解しやすく」「より意義のある」学習が可能になることが、本来の目標であるはずである。そうだとすれば、教員側の改善努力が学生の学習改善に有機的につながるように受益者たる学生の意見を積極的に採り入れることはFDにとって自然な帰結である。文科省が「教員中心の大学から学生中心の大学へ」と主張するのも、このような観点からにほかならない。

第二に、学生自身の意識改革がFDに不可欠である。FDを進めて大学教育が変わろうとしても、学生たちがそれに呼応する変化を見せなければ、FDの意義は半減する。大学教育の大衆化・実践化の進行の中で、学生が自ら積極的に学ぶためには環境づくりが必要であるとし、中央教育審議会の答申「単位の実質化」を先取りした。

第三に、こうした活動に学生が積極的に関与することで、学生自身の精神的・知的成長を促したり、積極的な行動力を涵養したりする教育的な効果をねらう側面も指摘された。現代の若者が「指示待ち症候群」の言葉で代表されるような受動的側面を改善して、能動的学習への変換が期待できるとしている〔詳細は、橋本勝「FDと学生力—岡山大学 学生・教員FD検討会の1年—」『京都大学高等教育研究』（第8号、2002年）を参照〕。

『読売新聞』（2007年7月3日）「教育ルネサンス」の欄でも、岡山大学の学生参画型授業の取り組みが紹介された。同大学田中副学長は、「学生参画型を進めた開拓者としての責務。岡山大は研究業績が

高く評価されてきたが、教育にも力を入れるのは時代の要請だ」と述べている。学生参画型の授業開発は昨年、和歌山大学などで、今年から静岡大学でも導入され、学びの主権者を中核に据えた改革が、大学全入時代の今、注目され始めたと報じている。同大学では、授業改善や教師力向上を全教員に徹底させるため、学生の授業評価アンケートを教員の昇進や給与に反映させる検討も始めた。同大学の授業改善を主導したのが、「橋本メソッド（方式）」で知られる橋本勝・教育開発センター教授である。同大学の「学生・教職員教育改善委員会」は、学生を中心として難解な表現が多かった「シラバス」を、曜日や時間ごとに並び替え、わかりやすい表現に直し、さらに、同委員会主催で履修相談会も行っている。

筆者は、岡山大学における取り組みに参加するために、9月8日に大阪国際空港（伊丹）に飛んだ。台風9号が上陸し、北上している最中であつた。以下に、プログラムについて紹介する。

これは、「第4回教育改善学生交流 i See 2007」と題したもので、学生参画型教育改善を目指す岡山大学が、3年前から学生の自主企画として開催し、毎年、全国から約100名の学生・教職員が参加している。第4回は、大学教育改善の第一歩である「学生の声」を引き出しながら、徹底討論を行うことを目指し、全国の大学生から提案された大学生活、大学教育についての6つのテーマについて徹底的な議論を深めた。採択された6つのテーマとは、以下のようなものであつた。

- 1) 「英語 I やキャリア対策 (S P I, 漢字など) の科目は携帯ゲームソフト等で単位認定を」 話題提供者: 三重中京大学 3年 西岡大地
- 2) 「学生による学生支援のアルバイト化」 話題提供者: 兵庫教育大学大学院修士 1年 上野秀敏
- 3) 「きみはなぜ、そこにいるの?」 話題提供者: 静岡大学 3年 小杉美沙登
- 4) 「学生に合わせた教育内容の削減について」 話題提供者: 名古屋大学 4年 黒岩 健
- 5) 「大学教育への学生参画2.0を考える」 話題提供者: 東京大学大学院博士 3年 安田淳一郎
- 6) 「君は授業に出る? 出ない? !」 話題提供者: 大分大学 2年 諸関大輔

田中宏二副学長も開会の挨拶の後、第4グループに終日参加した。



参加者は、事前に一つのテーマを選択して、参加メンバーとして議論に終日加わった。筆者は、第6グループの「君は授業に出る? 出ない? !」に出席した。このグループを選択理由は、学生がどのような理由で授業に出席し、あるいは欠席するのか、学生の「本音」を覗くことで、シラバス作成や授業改善に役立つと考えたからである。このグループの話題提供者は、「私は授業には出るべきだと思いますが、出席しなくても、出席を他の人に代わってもらい、配布資料の手配、試験前のノートコピー等を要領よくしている友人もいます。そうした学生から見ると自分が馬鹿みたいかもしれません。でも、せっかく高い学費を払ってもらっている親に申し訳ないとも、また、専門的知識のない私たちは、専門研究者の話を聞くことも大事だと思います。ここでは、授業出席の意味の論議を通じて、学生にとって興味を持てる授業とは何か、逆にまた関心をそがれてしまうような授業とは何かを考えたいと思います」と問題提起した。論点1では、「授業の出席について」で、出席している学生の意見をまとめると、「授業はつまらないが、出席点のために仕方なく出ている」と「授業が面白い、つまり、興味・関心がある授業だから出席する」と対照的ではあったが、これが出席した学生の「本音」である。逆に、出席しない学生の意見をまとめると、「適当にやって、結果的に単位を落とさなければいい」と「楽な」授業を選

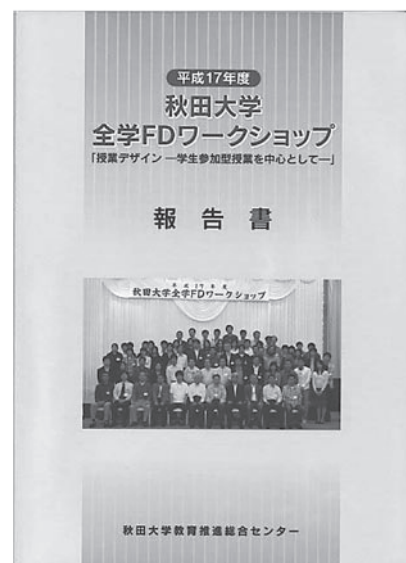
ぶ傾向にあると分析した。論点2では、「おもしろい授業、つまらない授業とは」で、学生にとって、おもしろい授業とは、「興味・関心のある授業」、「目的がはっきりしている授業」、「途中で小休憩を設けてくれる授業」、「内容がコンパクトで、説明が分かりやすい授業」であり、つまらない授業は、その逆ということであった。

このグループにおける学生の熱心な議論に参加して、シラバスの果たす役割がきわめて重要であることを再認識した。学生の視点に立ったシラバス作りをすることで、テーマに掲げた多くの問題点を解決できるのではないかと考えた。

2 秋田大学の取り組み

FDが多様な学生を授業に効果的に導き、意欲的に学習させるための教授法を研修することであると考えるならば、授業でも多様な意見が反映される改善や工夫が求められるべきである。学生が主体的に学ぶグループ活動やプロジェクト方式による能動的学習が効果的であり、学生が主体的に参加するFDワークショップが望ましいことになる。

秋田大学全学FDワークショップ「授業デザイナー学生参加型授業を中心として」は、注目に値するもので、FDの理想型といえる。FDワークショップの成否の鍵は、学生の積極的な参加と事前ガイダンスによる周到な準備にある。同大学では、参加費等は大学側から支援があり、徹底した事前のオリエンテーションを踏まえることから、参加者学生からの評価も高い。何よりも、教員だけではわからない着眼点や柔軟な発想が相互の議論を高め、その結果、授業シラバスにも学生が意欲的に参加したくなる授業設計となっている。同大学の全学FDワークショップの実施要綱によれば、学習者中心の大学教育を行い、幅広い教養と深い専門性、豊かな人間性と高度の倫理を備えた人材を育成することを中期目標に掲げ、目標達成の方策の一つとして、成績評価・授業デザインに関するワークショップを実施している。授業デザインも、学生参加型授業で、「学習者」中心の授業の充実に資することを目的とし、2004年度から実施され、2006年度は30名の教員に加えて、20名の学生の参加協力を得て実施された。学生の参加費用は、学長裁量経費から支出されていることから、秋田大学の授業改善への積極的な取り組み姿勢を伺うことができる。



以上、大学における授業改善に学生参加型に取り組んでいる二つの大学を紹介したが、他にも類似した取り組みを行っている大学がある。文科省もファカルティ・デベロップメントとは、「教員が授業内容・方法を改善し、向上させるための組織的な取組の総称である。」と定義づけているように、取り組みに学生が参画することも重要であるといえる。

アメリカでは、最近、FDという言葉を使用しないで、ティーチング・エクサレンスと呼称して、授業改善に向けて総合的な取り組みであると位置づけている。本学でも、FDワークショップを充実させ、授業シラバスの見直し、書き直し、ラーニング・ポートフォリオを活用した成績評価による教育の質の向上を目指しているが、教員のグループ作業に学生を参画させることで、より実り多い成果が期待できると考えている。

(文責 土持法一)